

私の保育

——幼稚園生活で大切にしていること——

松原美智子

本来教育は自主的、創造的に行なわれることが大切であります。

教師も子供も自分の力で考え、体当りで遊び共に学び、共に育っていくような生活ができるよう努力しなければなりません。

子供たちが自主的に遊ぶ中には、ちゃんとしたルールがあり、それぞれの子供が責任をもって遊んでいます。生きていくためのルールをこの時代からもう作り出していると言えます。

保育者はしばしば指導者でありすぎると指導することがあり規制することにすり変わっても気づかないことがあります。

子供のよさが観えず、すぐ回答を出してしまい、子供のもっているイメージを待つことができなく口出しすることもあります。

子供と一緒に生活する一日をなんとなく生活するのでなく、それぞれの教師の持味を出し、暖かいものが心の奥に流れ合うよう一人一人の子供の心に響かせ、いつか、どこかでそれが役に立つものと信じて生活していきたいと思えます。

「くり返されるリズムを考える」

前にも述べましたように、私は子供たちの自主的な発想と教師のもっている経験とを互いに出し合い生活していくことを何よりも大切にしています。子供たちが最も安定した一日

を送るために生活のリズムが毎日毎日違っていたりしたら落ち着かないでしょう。くり返される毎日の生活の営みの中で子供は育つと言えます。表面的にはいろいろな子供がいてごつごつしているかもしれません。しかしその中には、思いやる気持、励まし助け合いの気持が生まれ子供らしく育て、活気に満ち雑草のごとくのびのびと遊ぶ中に集団のルールが守られ、基本的な生活習慣も身につくようにして、きめ細やかな生活を心掛けています。

「子供とゆっくり遊ぼう」

遊びの興味を続けさせ、熱中させるかは、教師の心のゆとりと、本気で遊んでいるかどうかで決まってくるものです。

いろいろな遊びに入ってやりたいと思えばちこちらと歩くだけでは意味がありません。これではすべてが不安定となり充実しないことになります。

子供とゆっくり相手をする覚悟をして入ると子供も本当に遊んだという満足感を味わうものです。また遊びは正しく遊べるまで十分にかかわってから次の遊びへ移動しないと、教師がその場を去ると上手に遊べず消滅してしまう場合が多いようです。子供たちの遊んでいるところを見て、どの遊びを

中心にし、深めていくかの判断でその一日が充実した日になるか決まってしまうようです。

リレー遊びの一例を上げて考えて見ることにします。九月の中頃からリレー遊びが盛んに行なわれるようになってきました。バトンを持って喜び勇んで出て行きます。初め一・二回はトラックを回って上手にバトンも渡し走っています。ところが三・四回くり返すうちに、トラックをしつかり守らず、強い子が何回も走って順番も守らず、真剣さがなくなっ てまいりました。時々教師が来て一緒に遊んでもらえる時は、本気になりますが、遊びからはずれるとまた同じ結果になってしまうようです。考えて見ますと、何んでも遊びに興味をもった時の初めが大切で、たとえ少人数であっても、赤・白チームの人数の確認、ゼッケンをつけさせ走る順番も決めて、正しい遊び方を方向づけておかないと、いつまでたっても育ちません。遊び方一つにも教師のちょっとしたアイデアで正しく、楽しく遊べるということになります。

「毎日の記録の積み重ねを」

私たちは記録を大事にしています。記録を通して言えることは、書くことによって教師のたしかな目が養われるもので

す。とかく教師は子供の表面的な行動、言動に押し流されやすく、その子の内面にゆっくりふれようとしないところがありません。

一人一人をじっと見つめ心のつぶやきを感じとれるような姿勢にならなければならないと思います。

こうして毎日の記録の積み重ねを大切にしてみますと、今まで何んでもなかった行動に意味があり、意義があることを痛感すると同時に、何げなく言葉をかけたり、動いたりしていたことを反省します。記録を続けることによって子供と教師が見えない糸でしっかりと結ばれていることを忘れてならないものと思います。教師の喜びもこういうところで味わうものです。

「戸外遊びを充実しよう」

私の園では戸外遊びを大切にしています。子供たちは戸外で体を動かして遊ぶことが大好きで、ボール遊び、鬼遊び等十月頃から盛んになってきます。思いきり体を動かし、汗を流して遊んだ後は子供たちもさわやかな落ち着いた気持ちになるようです。特に五歳児は戸外遊びで体ごとぶつかり、仲間への思いやりやいろいろなルールについての相談、協力等の

広がり、深まりも出て来ます。

ボール遊びも初めは簡単な受けっこ、けりっこ、投げっこ、つきっこから次第に「先生本当のサッカーやろう」と子供の方から要求するようになり、ゲームらしいものが生まれてくるものです。ごく簡単なルールから初め園庭全部がコートで、ゴールの中に入ったら一点というくらいにします。抵抗なくゴールにボールが入ってしまうので「先生ここにだれか立ってボール止める人がいるよ」とすかさず子供から提案、このように次から次へと遊びが複雑になり、面白さが増して来ます。

子供たちは汗を流し必死でボールを追って走ります。こうなれば教師も力を加減せず、思いきってゲームに参加します。五歳児にはこんなところが必要なんです。ドッジボールも二面コートを使い行なうのですが、遊び込んできますと、教師もいいかげんに弱いボールを投げますと、本気でないことを悟られ、子供たちに意欲を燃やすことができな場合があります。真剣にボールに取り組み、戸外での遊びが充実しますと、他の遊びへの取り組みも違って来ます。心も体も健康で明るい豊かな生活は、大いに体を動かし育つことも忘れてはならないものと思います。それが大人になった時、大き

な精神力となつてくれるものと望みを心にいだいています。

「教師が手本を示して見守る」

最近うれしく感じていることの一つに便所の下駄、雨の日の傘の始末が大変きれいにそろふようになったことです。いろいろな身につけさせ方があると思いますが、私の園ではみんなの前で仕方を強制しないようにしています。注意すればその場では守るかもしれませんが、それが一人になった時どうでしょう。言わなければやれない子になってしまいます。また便所などの園でも線が書かれ、わくが決めてあるようです。私の園では指示してありません。次の子がはきやすいようにいつも並べられるようにだんだんなってきました。一学期はとにかく上手に並べられませんでしたし傘は傘立にいつぱいになって入っていました。まず教師から直すことを基本にしてみました。そうしてきてもなかなか気がつけず、途中でこの考え方は私たちの子にはだめではないかと考えてしまったこともありました。二期に入り、子供たちとのつながりも深まるにつれ自然に身につけていることに気づき、本当にこれでよかったと感じています。

言つて聞かせるよりはして見せることの方が子供の活動を

啓発する。しかしして見せることは子供の活動の誘導のためであつて、見せた通りの型に子供をはめこむためではありません。待つ指導の大切さを知りました。

「雨の日は雨の日の生活が」

朝から雨がしとしと降っているので子供たちは、部屋の中で空箱で製作しています。時々空の方を見上げては空模様をうかがっています。しばらくすると小雨になり、空も少し明るくなったようです。子供たちは待ってましたとばかりに園庭へとび出していきました。いつもなら園庭もところ狭しと遊ぶのですが、こんな雨あがりには我がものとはかり何も束縛されることなく遊びます。長靴をはいて水たまりに入つて喜ぶ子、ぬれることも気にせずブランコに乗ったり、鉄棒で遊んだりします。そんな時の語らひは、のびのびとしているように部屋の窓から見ながら感じたほどです。と今までやんでいた雨がまた降り始めました。子供たちはいっこうに気にせず砂場で砂だらけになって遊んでいます。私は傘をさして迎えに行くことにしました。みんなの所まで雨の歌を歌つて「雨が雨が降っている……」と「傘を持ってまいりました。」と傘をさしのべました。「ありがとう」と言つて傘の下

で砂遊びを続けました。まさか傘の下で砂遊びができると思わなかったのでしょう。「フフフ、フフフ」と微笑みながらダンゴ作りをしています。傘からしずくが落ちるとダンゴがぐずれ壊れてしまいます。それを発見し何度もくり返してやっています。またしずくを見て「雨の小人さんだ」と言って手のひらに受けしずく集めも始まりました。

雨の日は雨の日の生活があるとはこのことだと思えました。この時部屋の方から大声で「ぬれちゃうわよ、入っていらっしやい」と言ってしまったらどうでしょう。雨の日のこの思い出は心に残るはずありません。

「名前を呼ぶのも心をこめて」

私たちは何げなく子供の名前を呼んでいるように思いますが、声としては普通に出しているように思われても、心の片隅で常に乱暴したり、話が聞けなかったりして教師の心にとめている子に対して、アクセントが違うように思います。いつも傍観的な子には今日は何んとか入ってほしいと願って名前を呼びます。でもまたきつことわられると思えば呼び方も変えます。常に信頼関係ができている子にはそんなに気にとめなくても大丈夫でしょう。本当にあの子は困る、私が一

生懸命でもいっこうにやろうとしないと心のどこかで通じ合おうとしないでいると、どんなに優しい言葉をかけたとしてもだめで、教師の気持を読み取ってしまいます。ですから何をしてもうまくかみ合わないということになります。きつとこの子を何んとか遊び込まそうという教師の自信とその子を理解しようとする努力をせず、ああいう子だから困るではありません。言葉にもリズムがあるように、名前を呼ぶのにもリズムがあります。さわやかな呼び方でありたいと常に私は心しています。

「気持のよい関係を」

朝登園するなり洋子と達也が昨日のリレー競争の結果の話し合いをしている。「ねえ達ちゃん、私たちがやだね。」「なんで。」「だってさあ、^{ヤスユキ}康文君がいるとリレー負けちゃうもんね。」「おお、ぼくはすごい早いけどなあ。」「達ちゃんは早いけど、康文君なんかいない方がいいね。」と盛んに昨日のリレーで負けたことを強調している。と洋子は私のいることに気づいた。でも悪いこと言ってしまったという顔もしないでここに微笑んでいる。康文は小柄で運動をあまり興まず、静的な遊びをいつもしている。私は「洋子ちゃん負けてくや

しかったの」の聞いてみた。「うん」「また今度康文君の分までみんなでがんばれば、洋ちゃんだって、達ちゃんだっているからきっと大丈夫よ」「康文君も自分の力を全部出して頑張ったんだからみんなで応援してあげて」「うん、でも」と私の言葉にまだ納得がいかないようである。達也は「うんそうだよ、今度こそぼくがみんなぬかしちゃう」と面白い口調で言うので洋子も私もふき出してしまった。康文はまだ登園して来ない時の出来事で私もすくわれた。

五歳児になると、お互い子供同士を見る目も鋭く批評し合う場面があります。子供同士の批評は、教師よりも厳しく感じるようです。

この頃になりますと子供の言葉にも意味があり、けんかも社会性の芽をたくさん含んでいます。

学級づくりをしていく上でこの辺をしっかりとらえ、正しい方向に誘導していかないと弱い者いじめになってしまい、ふん囲気を壊してしまうものです。またこの頃から学級意識も高まりますので一人の問題としないで、学級全体で考えていくようにすることが大切です。

その後洋子と達也にチャンスが回ってきました。一位になったのです。その喜びよりは言葉で言い現わせないほどの歓

声でした。

洋子や達也にはそれからと言うもの康文の事が聞かれませんでした。

「きめ細やかさ」

一人一人を大切にする保育、みずから選んで行なう経験や活動が重要視されてもう十何年になるでしょうか。

それ以来お互いに子供を見ようとする目はたしかになって来たと思います。反面子供尊重の言葉を深く考えないで、放任と自由とのはき違いをしているところもあるようです。

きめ細かい心づかいをして、心では教師自身自分を厳しく見つめていかなくはなりません。子供をはれる者のようにふれるのではいけません。真实性のある、本当の心をぶつけ合う生活が子供の心に響くものと思います。

型にはまった中には

型にはまった子供しか育たない。

型にはまった生活は

型にはまった言葉しか生まれない。

(愛知・豊田市立美山幼稚園)